

「平和の俳句 3」

2015年03月03日

「東京新聞」は今年の始めから、毎朝刊の一面に「平和の俳句」を掲載している。応募は最近、万単位で寄せられているという。平和を求める人々の思いを込めた俳句は読んで楽しく、励まされる。選者の金子兜太氏といとうせいこう氏の評が加わり、一層深みを感じさせてくれる。2月分の掲載から、心に残る俳句を紹介し、私の感想を書きたい。

まず、子どもたちの句は率直で、そのまま伝わる。「さべつとか、いやなきもちがせん そうだ 齊藤詩歌(8歳)」くいとうせいこう 小学校二年生が喝破する戦争の核心。憎悪をかきたてる者たちと、それに乗せられる者たち。両者を子供は見つめているのだ。> 多摩川の河川敷で殺された中学校一年生の上村遼太君はどれほど恐ろしく、痛かっただろうか。子どもたちの間で起こっている戦争に戦慄する。大人たちはどのように責任を負えるのか。「暴言をはかないことが平和へと 楯千実(12歳)」くいとうせいこう 小学校六年生からの一句。暴言だらけの世の中では、足元の平和もおぼつかない。話し合いの習慣がやがて外交にも通ずる> 「国会中継」のテレビを観て、ヤジの多さに辟易する。総理大臣のヤジには驚いた。平和を作れる人だろうか。「花たちがこわさを知らず咲いていく 柚原早希(11歳)」くいとうせいこう 十一歳にも不安は伝わっているのかもしれない。花は変わらずに咲くのに。あるいは、花の平穏を自分たちにも求める気持ち。> この少女は怖さを十分に知っている。怖さを知らずに咲く花を羨望の思いで見ていると思われる。安心が子どもたちの確かな成長を育む。

「九条」という言葉を入れた句も当然多い。「九条で夏の球児の輝けり 野呂秀紀(61歳)」く金子兜太 とくに高校球児は夏の花形。かれらは生き生きと打ち、かつ走る。思えば、それも平和だからだ。平和だから輝くのだ。> スポーツは平和だからできる。しかし、スポーツ選手の平和への言葉はあまり聞かないのはなぜだろうか。「九条があぶない まっすぐな赤子の目線 広瀬美知子(65歳)」く金子兜太 憲法九条が国会であれこれ解釈変更されていて、日本の平和が危うい。赤ん坊までが心配して見つめていますよ。> 安倍政権は九条を墨で塗りつぶしてしまっているようだ。暴走に歯止めがかけられない状況を国民は真っ直ぐな目線で見つめ直す時ではないか。「九条を知らずに眠る凍土の父 遠藤道雄(72歳)」く金子兜太 シベリア抑留で無残に死んだ父。「九条」があればと切に思う。>くいとうせいこう あたかも「父」がいまだに凍土の中にいるように思える。見つめている。> シベリアに抑留され、戦後、重厚な絵を描いた香月康男の「シベリア・シリーズ」を思い出す。九条は戦死者を出さない。

「沖縄や春の礎に父の名在り 関根元(71歳)」く金子兜太 『平和の礎』に、父の名を発見した感動。激戦の沖縄を思う。>くいとうせいこう 私の伯父の名も沖縄の礎の碑にある。今もそこから見られていると感じる。> 礎には日本人、韓国人、アメリカ人の名が皆、等しく刻まれている。靖国神社は天皇と国家のために死んだ人を合祀している。差別でなく、平等が平和の基礎である。「捕虜刺殺拒みし伯父の逝きて冬 漆原淳俊(68歳)」く金子兜太 捕虜を実験動物のように斬殺することは戦場ではしばしばだが、この伯父(歌集『小さな抵抗』の著者渡部良三氏)はそれを拒んだ。> 渡部氏は歌集に「『死』に比べ凄しきリンチに今日も耐ゆ生命の明日は思わず望まず」「強いられし傷み残れど侵略をなしたる民族のひとりぞわれは」「戦争の責任ばかりかされて歪みゆく時代の流れに正すすべなし」と詠っている。「高貴」という言葉は渡部氏にこそ相応しい。